

看護教育におけるデス・エデュケーション —— 学生の死者儀礼に関する調査 ——

伊 東 久 恵・高 田 節 子

The Study of Death Education on Nursing Education — Ritual Behaviors for The Dead of Students —

Hisae ITO, Setuko TAKATA

The purpose of this study was to obtain the basic data for the study of "Death education on nursing education". We investigated 235 students aged 18-21 in the school of allied health science 0 University (return rate 100%). The questionnaire was composed of the questions about experience to be presented at the familiar person's last moment, experience to be attended at the funeral, intention to take their child to the funeral in the future, and knowledge of ritual behaviors for the dead.

The results are as follows :

- 1) About 20% of students had experienced the dying hour of familiar persons who were almost grandfather, grandmother, great-grandfather and great-grandmother.
- 2) Almost all students had attended at the funeral as the survivors.
- 3) About 2/3 students had intention to take their child to the funeral in the future to let them learn death. About 1/3 students had no intention to take their child to the funeral, or did not decide their intention yet.
- 4) Among ritual behaviors for the dead, students well recognized "Kiyome no sio" and "Kita makura" that were well known in the daily life, and "Hidarimae" and "Tatemusubi" that had learned in the lecture of nursing for the dead. Conversely, despite of learning "Yukan", few students knew it because they didn't conscious of it as the ritual behavior.

The ritual behavior is important to alleviate the survivors' grief. Death education on nursing education must introduce Thanatology (interdisciplinary curriculum on death including ethnology, sociology etc.).

Key Words : Death Education, Funeral, One's dying hour, Ritual behavior

1. はじめに

社会構造の変化, 医療機関の発達と普及, 経済的余裕などにより, 人間の生病死の大部分が病院で起きている状況, 即ち, 病院化社会¹⁾の出現が指摘されている。

1981年の病院死は59.8%であったが, 現在は70%以上になっている。このような変化の中で, 医療の場ではターミナル・ケアの重要性と必要性の

認識がたかまり, さらには, デス・エデュケーションの必要性が強くさげばれている。

一方, 核家族の増加により, かつてのように家庭で老人の死を看取するという, 人の死を身近に体験する機会が, ほとんどなくなってしまった。

このような, 死が隠されていく過程の中で, 死者に対する儀礼は内容の乏しいものになって行き, その結果, 悲しみ, 喪失の経験あるいは悲嘆を処

理する能力が、欠如してきている²⁾といわれている。

医療の場合は、救命、延命、病気の治療のみならず、死の看取りの場としての機能をもとめられている。終末期医療において看護者は、患者の臨終に立ち会い、死後の処置を行いながら、家族の悲嘆への援助も行う必要がある。

臨終及び死後の処置の場は、儀礼的意味を強く含んでいる。

一般に、遺された者は、儀礼（死者儀礼）をつみ重ねることで、肉親の死を受け容れていくといわれており、近い将来、医療従事者となる学生にとって、儀礼に関する知識を持つことは、必要なことと考える。

そこで、看護教育におけるデス・エデュケーションを考察するための基礎資料を得る目的で、死者儀礼に関する調査を行った。

（死者儀礼と儀礼は同じ意味とした）

2. 方 法

O短大看護学生235名（1年77名，2年82名，3年76名）を対象に，教室内で調査用紙を配付した。

調査内容は，1）身近な人の臨終の場にいた経験の有無とその臨終を迎えた人と場所，2）葬儀に参列した経験の有無とその年代と誰の葬儀か，3）将来親になった時，子供を臨終の場に連れていくか，その理由，4）死者儀礼についてである。

調査は，1991年9月に行い，回収率は100％であった。

3. 結果と考察

学生の年齢は，18～21歳で，O市を中心とした中国地方5県の出身者が79％を占め，全体の76％は核家族であった。

1）身近な人の臨終の場にいた経験

経験のある人は21％で，その内の80％が祖父母，曾祖父母の臨終であった。これは，他の調査とはほぼ同じ率を示しており，この年代の平均的な経験度といえることができる。

父母，兄姉（弟妹），叔父叔母，その他友人などの臨終は，各4～6％であった。

ほとんどの学生が，1回のみの経験であったが，2回の経験1名（叔父，友人），3回の経験2名（祖父，親，高校教諭）（祖母，兄，親戚の人）あり，わずか3名とはいえ，年齢にしては多い経験をしている。

臨終を迎えた場所は，病院67％，家庭が33％で全国的平均より多いといえる。家庭で臨終を迎えているのは，祖父母，曾祖父母であった。病院死，あるいは施設死が増加しているなかで，約1/3が家庭で看取られていることは，地方の特色とみることができ，住み慣れたわが家で，親しい人々に見守られて最後の時を迎えられた老人や，家族の存在を知ることができる。

2）葬儀に参列した経験

葬儀に参列した経験のある人は93％，経験のない人は7％で各学年に5～6名いた。ほとんどの人が葬儀に参列した経験を持っていた。

遺族の一員として参列した人が42％，一般会葬者として11％，遺族と一般の両方を経験している人は40％で，遺族の一員としての葬儀経験者は82％にもなる。これは，東京周辺の出身者の多い女子大生を対象にした調査⁴⁾の77％より高い率で，地方である特徴を示しているといえる。

一般会葬者として参列した葬儀は，友人の家族41％，友人25％，近所の人17％，学校の先生9％，その他父の友人，先生の親，PTAの役員などで，友人の家族への会葬が多いことが目立っている。これも，社会的連帯が希薄になっていても，儀礼への参加意識は強いという地方の特徴とうけとめられる。

大学入学までに葬儀に参列した経験は，小学校入学前9％，小学校低学年16％，小学校高学年18％，中学校29％，高等学校28％で，これは，祖父母，曾祖父母の死が中学，高校時代に多いものと考ええる。

大学入学後は，3年生8％，2年生7％，1年生2％と，年齢による差が明確に表れている。

3）将来親になった時，子供を臨終の場に連れて行くか

死の準備教育として，臨終の場の経験をどのようにとらえようとしているかをみるため，将来親

になった時、子供を臨終の場に連れて行くかを設問した。全学年でみると、連れて行く66%、連れて行かない2%、わからない32%であった。連れて行くを学年別でみると1年、2年、3年はそれぞれ66%、65%、68%であり、わからないは33%、32%、30%であり、連れて行かないは、1%、3%、1%であり、あまり大差はなかった。次いで身近な人の臨終の場にいた経験のある人・ない人および臨終の場に連れて行く・行かないを理由別にして概観する。理由別とは、自由記載したものを、同質の意味をまとめて回答数とした。

表1 将来親になった時、子供を臨終の場に連れて行くか
身近な人の臨終の場にいた人

学年	回答数	臨終の場に連れて行く理由 (まとめ)
1	7	A 臨終に立ち会うことは「死」について知り、感じ、考え、教える機会である
	2	B 体験からそう思った
2	9	A 臨終に立ち会うことで人命の尊さを知り、「死」について感じ、考え、教える機会である
	3	B 別離として必要なことである
	2	C 臨終に立ち会い儀礼を教え体験を伝える
3	4	A 臨終に立ち会うことで「生」や「死」について感じ、考え、教える機会である
	3	B 臨終に立ち会う体験を伝える

表1のごとく身近な人の臨終の場にいた人の連れて行く理由として1年生は、A 臨終に立ち会うことは「死」について知り、感じ、考え、教える機会である。B 体験からそう思った。2年生は、A 臨終に立ち会うことで人命の尊さを知り「死」について感じ、考え、教える機会である。B 別離として必要なことである。C 臨終に立ち会い儀礼を教え体験を伝える。3年生は、A 臨終に立ち会うことで「生」や「死」について感じ、考え、教える機会である。B 臨終に立ち会う体験を伝える、であった。

次に経験のない人では、表2のごとく、1年生は、A 臨終に立ち会うことは「死」について知り、感じ、見つめさせ、分からせ、理解させる機

表2 将来親になった時、子供を臨終の場に連れて行くか
身近な人の臨終の場にいた経験のない人

学年	回答数	臨終の場に連れて行く理由 (まとめ)
1	13	A 臨終に立ち会うことは「死」について知り、感じ、見つめさせ、理解させる機会でありたい
	13	B 臨終に立ち会ったことを貴重な体験とさせたい
	3	C 臨終に立ち会うことは必要だと思うから
2	26	A 臨終の場に連れて行くことは「命の尊さ」や「死」について知り、感じ、理解させ、教え、「死」をのりこえさせるための機会である
	14	B 臨終の場を経験することにより「死」を現実のこととしてとらえ、受入ができるようになってほしいため
	10	C 避けられない別離を体験することは必要なことだ
3	14	A 命の尊さを知り「生」を考えさせるとともに「死」について感じ、考え、理解させて身近な人の「死」を受容させるため
	10	B 人間には避けられない「死」の現実があり最期の別れをさせるため

会でありたい。B 臨終の場に立ち会ったことを貴重な体験としたい。C 臨終に立ち会うことは必要だと思うから。2年生は、A 臨終の場に連れて行くことは「命の尊さ」や「死」について知り、感じ、考え、理解させ、教え、「死」をのりこえさせるための機会である。B 臨終の場を経験することにより「死」を現実のこととしてとらえ、受入ができるようになってほしいため。C 避けられない別離を体験させることは必要なことだ。3年生は、A 命の尊さを知り「生」を考えさせるとともに「死」について感じ、考え、理解させて身近な人の「死」を受容させるため、B 人間には避けられない「死」の現実があり最期の別れをさせるため、であった。以上身近な人の臨終の場にいた経験のある人・ない人の臨終の場に連れて行く理由を比較すると、これもまた大差のないことが分かる。

さらに、臨終の場に連れて行く理由をより具体的に学年別でみると、1年生の、身近な人の臨終の場にいた人では、『人が「死」ぬということを教

え、「死」がどんなものなのかを感じさせる場であるから』とか『臨終に立ち会うことで人の「死」に対する感情が少しでも分かれば良いから』であり、臨終の場の経験のない人は、『ペットの「死」だけでなく身近な人の「死」を知ってもらいたいから』『「死」というものがどういうものか分からせるため』などとし、「死」についてのみに注目して知り、感じ、考え、教える機会であるにとらえ、全体に「死」について考える視野が狭いようにうかがえる。2年生の臨終の場の経験のある人では、『人命の尊さを知ってもらいたいため』『人間の生命というものが、どんなに尊いものか感じとって考えてほしいから』などがあり、臨終の場の経験のない人では、『命の尊さを教える』『子供が人の「死」を見ることによって「生」とか「死」とか分かってくれるかもしれない』であり、人の「命の尊さ」が「死」と関連して感じ、考え、教える機会として受け取っていることが多い。これは1年生よりも、「死」について考える幅が少し広がっているといえよう。3年生の臨終の場の経験のある人では、『人の「死」を見ることで「生」きることを大切に考えると思うから』とか『「死」ぬということを実際に見ることで「生」をみつめることができると思われるから』があり、臨終の場の経験のない人では、『「死」を看取ることで「死」について考える機会になるだろうし、子供が「死」に対して恐怖を抱かぬように話せまた、その人の「死」を受容することができ同時に生についても考える機会になると思うから』とあり1年生、2年生より、「生」や「死」をより幅広く感じとっており、看護学生としての死生観に関する意識が高まっているとうかがえる。

臨終の場に連れて行かないは表3のように、2年生の臨終の場の経験のあるが1人・ないが1人で理由は、無理に人の「死にめ」にあわす必要はないと思うから、またショックを与えるからとあり、人情として良く分かる意見である。臨終の場に連れて行くかどうかについて、わからない理由は理由の全例について記載がなかったが、この結果から何も考察することが出来ない。しかし、今後臨終の場の意義や葬送儀礼をどのように認識してい

表3 将来親になった時、子供を臨終の場に

連れて行くか

身近な人の臨終の場にいた経験のある人・ない人

学年	回答数	連れて行かない理由 (まとめ)
2	1	経験のある人：子供が小さい時には無理に人の「死」にめにあわす必要はないと思うから
2	1	経験のない人：子供にショックを与えないため

るか、また死の準備教育をどのように解釈しているか、検討する余地を残していると考えられる。

社会構造の急激な変化や高度医療は延命治療を優先して病院死を増加させている。このことは家族に看守られながら、畳の上で大往生するという古来からある死の考え方を大きく変貌させた。なかでも都市化は地域共同体を崩壊させ、そのうえ核家族化が加わって、古くから伝わっている伝統的な臨終や葬儀のあり方を変えている。臨終時の儀礼や葬儀の意味は、残された者がそれを行う過程で次第に死を受容し、悲嘆や喪失感を軽くすることにある。

現代のように核家族化が進み、病院死が多くなると家族や知人の死を直接経験する機会が少なくなった。またもし、経験したとしても、例えば、家族や知人の死を告別式の日之初七日をするように葬儀を短縮化させ、平常の生活に早く戻ろうとしている。このように時代が移り、生活様式が大きく変化すると、死の受容を困難にしているのではなかろうか。そこで臨終や葬儀の場の経験は極めて重要であり、死の準備教育としてとらえることが大切である。

臨終の場や葬儀に子供を連れて行き、体験させることは、人生を豊かに締めくくる死者への配慮、死の恐怖への対応を現実に見て経験することになる。しかし、臨終の場や葬儀を経験させずまた、連れて行ったとしても、子供を邪魔扱いし、無視すると教育的配慮を欠くことになる。臨終や葬儀の場の経験は悲嘆をのりこえ、死の準備教育の機会としてとらえ、子供を意図的、計画的に教育することが肝要であるとうかがえた。

4. 死者儀礼に関する知識

儀礼は、遺された者の悲嘆や喪失感を解決し、社会復帰するためのプロセスとしての重要な意味を持っている。

しかし、社会的連帯が希薄化している現在、儀礼も簡略化し、忘れ去られつつある。若い世代の学生はどうかを、臨終から葬儀までに行われる儀礼の中から13項目を取りあげて調査した。結果は図1の通りである。

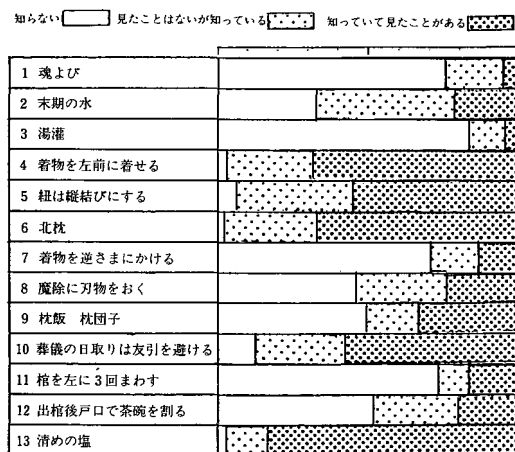


図1 死者儀礼13項目に関する知識

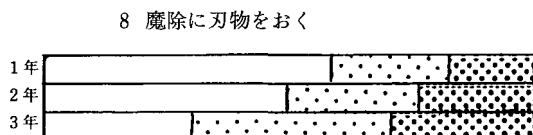
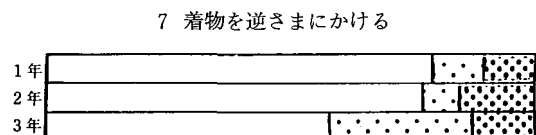
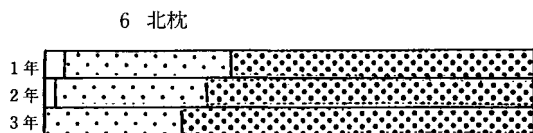
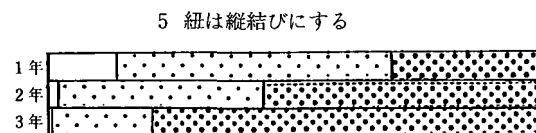
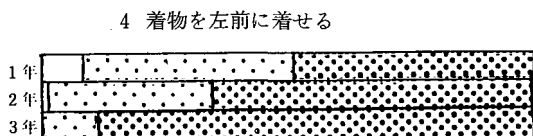
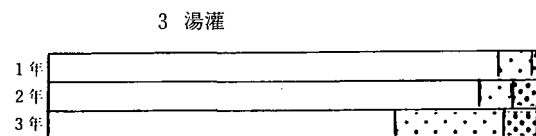
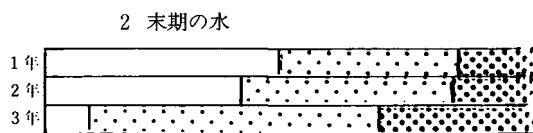
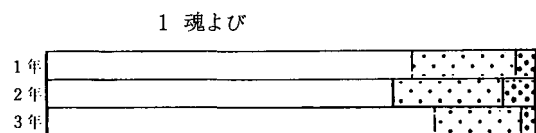
A) 知っていて見たことがあると回答した儀礼のうち主なものは、①清めの塩 ②着物を左前に着せる ③北枕 ④葬儀は友引きをさける ⑤紐は縦結びにするで、これらは、半数以上の人が見たことがあると回答した儀礼である。

B) 見たことはないが知っていると回答した儀礼の主なものは、①末期の水 ②紐は縦結びにする ③北枕 ④魔除に刃物をおく ⑤葬儀は友引きをさけるであった。

C) 見た経験の有無にかかわらず、半数以上の人が『知っている』儀礼は、清めの塩 (99%) 北枕 (98%) 着物は左前に着せる (97%) 紐は縦結びにする (94%) 葬儀の日取りは友引きをさける (88%) 末期の水 (67%) 魔除に刃物をおく (54%) 枕飯・枕団子 (50%) であった。

13の儀礼に関する知識について、身近な人の臨終の場にいた経験の有無では、『知っている』でまとめると、ほとんど両者の差はなかった。

学年別では、図2に示すように、“魂よび”のみ2年、1年、3年生の順であったが、その他はすべて学年の高い方が、儀礼に関する知識を持っている人が多かった。1年の生活歴の差でも、習俗に対する知識や経験の差として現れていることが



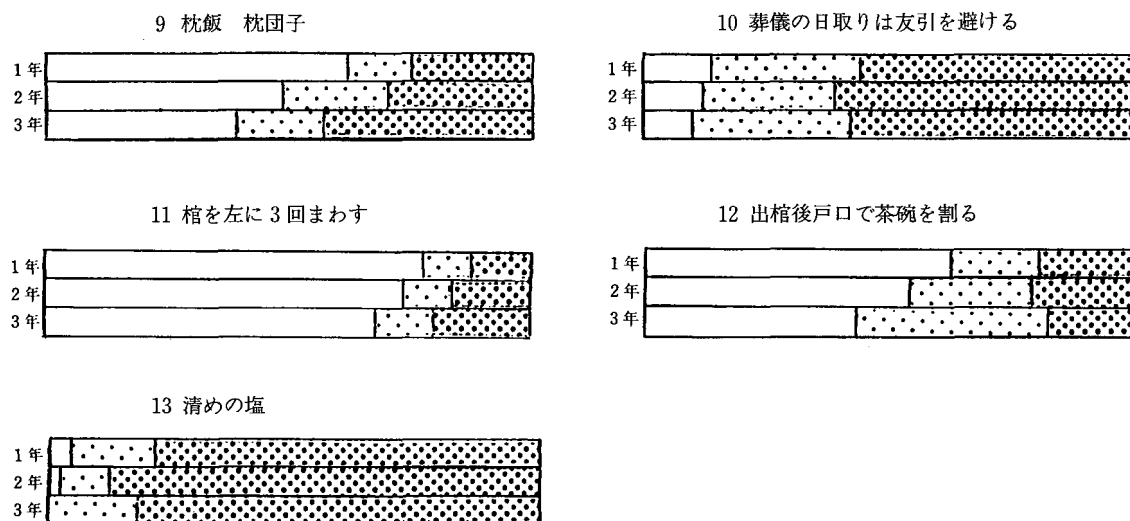


図2 学年別死者儀礼の知識

うかがえる。

清めの塩は、葬送儀礼の参列者が帰宅すると塩を撒く習俗として広く知られている。会葬御礼に塩の小袋を添えるのは、今やわが国一般の慣習となっている。塩によって、死にまつわるけがれを清め、死者と生者との間のけじめをつける⁵⁾、という本来の意味の理解より、一般的慣習として定着しているので、ほとんどの人が知っていたといえる。

北枕は、釈迦の涅槃（入滅）の姿になぞらえて⁶⁾、死者を安置する時の位置であり、日常生活では不吉とされている。従って、毎日のべる寝具の位置は、頭を北にすることをさけるように、習慣づけられている。橘⁷⁾の調査でも、99%が知っていると回答していることからもうかがえるように、生活の中に強く定着して、意識化されている儀礼といえることができる。

着物を左前に着せる、紐は縦結びにするは、死亡時の看護の中で、死後の処置として2年生、3年生はすでに学習をしており、その結果とうけと

められる。

着物を左前に着せる儀礼について、橘⁸⁾の調査では、知っている人が75%に対し、本調査では97%であったことから、学習効果の現れといえる。

日常生活の中から、着物を着る機会がなくなって、着物の着方のわからない人がふえている。医療の場では、生を求めている患者に、病衣が左前、紐が縦結びになることは、死を意味するため、縁起でもないと家族の怒りをかうこともあり、注意しなければならない。従って、死亡時に、着物を左前にすることや縦結びにすることを、手順としてではなく、死者儀礼として理解させるほうが、より意識化され则认为る。

末期の水については、見たことのある人は21%であるが、知識として知っている人は多い。これは、家族の誰かに教えられたものか、文学や映像からかは明らかではないが、おそらく、後者の影響が強いと考えられる。この儀礼は、死にゆく人に対する最後のはなむけの意味を持つ、仏教の儀式である。このような、臨終の場におけるわかれ

の儀礼を知っていることも、看護者として必要なことといえる。病院死がほとんどを占めるようになった現在、器械に取り囲まれ監視されながら生を終えるのではなく、家族に手を握られ見守られながら生を終えたい、人間的な死にかたをしたいと、人々は望んでいる。

看護者が、このようなわかれの儀礼に関する知識をもっていれば、家族が望む最期の時を過ごせるような援助を行うことも、可能となると考える。

D) 知らないと回答した儀礼のうち主なものは、①湯灌 ②魂よび ③棺を左に3回まわす ④着物を逆さにかける ⑤出棺後戸口で茶碗を割るであった。これらは、半数以上が知らないと答えている。

湯灌は、死後、遺体を清めるために体をふくことであるが、2年生、3年生は、終末時の看護につづく死亡時の看護の『死後の処置』と理解しているため、儀礼としての認識が乏しいと考えられる。橘⁹⁾の調査では、知らないと回答した人は22%であるが、本調査では84%であった。家庭での死が多かった過去においては、湯灌は死後の重要な儀礼であったが、病院死がほとんどを占めるようになって、家族の中にも儀礼としてのかわりの意識がうすれている。しかし、身内として心をこめ、語りかけながら、体を清める機会を持つことは、死を受け容れ、別離を覚悟するためにも意味があり、看護者は処置としてよりも儀礼としてうけとめて、家族にかかわることも必要である。

魂よび、棺を左に3回まわす、着物を逆さにかける、出棺後戸口で茶碗を割るなどは、死者への愛惜の情の反面、恐怖し忌避する生者の死のうけとめ方が儀礼となって伝わっているものであるが、儀礼の簡略化が進む中では、ほとんどみられなくなっている。

宇都宮¹⁰⁾は、儀礼は、悲哀を共同で表明するという社会的意味表出行為であり、そこには遺された者と他の人々との間の連帯が確認され強化される。儀礼を通して作用する人々の共感が死別後の悲哀を癒し、逆に、儀礼の欠如は悲しみを克服できないという死別後の不適応状態をきたすことを指摘している。

葬儀などにおける儀礼は、日常性のないものであり、時には奇異に感じられることもある。これは、儀礼のもつ意味を知らないためである。遺族は、一つ一つの儀礼を重ねることで、死者との別離を心にきざんでいることを、銘記しておかなければならない。

看護教育において、儀礼など死の文化に関する学習をもっと取り入れ、死別後の家族の悲嘆への援助として、悲嘆の緩和と儀礼のもつ機能を理解しておくことも重要であると考えられる。

5. 看護教育におけるデス・エデュケーション

医療の場において、看護者は、患者の健康の回復、社会復帰への援助をする。また一方では、死を免れない患者に対して、人生の大切な最期の時を、その人らしく希望をもって生きて行けるように援助し、さらに、遺された家族の悲嘆への援助も必要である。

現在の日本の医療では、脳死や臓器移植の問題、ターミナルケアなど医療の中における死のあり方が問われている。

古来より人間は、死をどのようにとらえてきたか。佐藤¹¹⁾は死の観念を解明するための一つの重要な鍵として死者儀礼をあげている。現代の生活様式、生活感情、思想内容は、古い時代のそれらと比較すれば、著しく変化しているにも拘わらず、死者儀礼は、元の意味が忘れられても、形式はあまり変化していない。本調査においても、由来がわからず見た経験がなくても、知識として知っている儀礼は多かった。しかし、人間の死を考察するためには、儀礼の本源的意味を知ることが重要である。

現在、人間の死が、あまりにも医学的見地のみで、論じられ過ぎている傾向がある。波平¹²⁾は、医学は人体を研究の対象とし、高い普遍性を持つ研究領域であるが、普遍性の高い知識を基本に行われる医療実践は、実践される社会の状況、その社会の人々が支える文化、医療者や患者個人の持つ属性によってその内容はことなる。医学における思考的枠組みがそのまま医療に持ち込まれることや、医療者の多くが医学と医療を分けて考えない

ために、様々な混乱をおこしていると指摘する。

一人の人間の死には、生物体としての死のみならず、戸籍の抹消などにみられる法的、社会的死、通夜や葬式などの死者儀礼の遂行にみられる、故人の家族、血縁者、同僚、知人の人間関係のネットワークの中での社会的死¹³⁾を認めることができる。医学的死と社会的死にはずれがあり、死を社会的角度からうけとめる視点を持つことは、医療従事者として重要なことである。

ターミナルケアの質が問われるなか、医学、看護の基礎教育におけるデス・エデュケーションの必要性和重要性が提言されつづけている。

看護教育におけるデス・エデュケーション・プログラムには、いろいろな工夫や試みがなされているが、医学や看護学の立場のみならず、広く民俗学や社会学、その他死に関する学際的な教科(タナトロジー)を取り入れて、系統的に教育することが必要であると考ええる。

ま と め

看護教育におけるデス・エデュケーションを考察する基礎資料とする目的で、看護学生を対象に死者儀礼に関する調査を行った。O短大生235名で年齢は18才～21才、回収率は100%ある。調査項目は学生の身近な人の臨終に立ち会った経験、葬儀参列の有無、将来自分の子供を臨終の場に連れていくか、および死者儀礼に関する知識である。

- 1) 臨終に立ち会った経験があるのは20%で、そのほとんどは祖父母、曾祖父母の臨終であった。
- 2) 葬儀参列はほぼ全員が経験しており、遺族の立場としての会葬がほとんどであった。
- 3) 将来自分の子供を臨終の場に連れて行くは約2/3であり、理由は死を学ばせる機会としてとらえ、死や生を学ばせる姿勢がうかがえたが、約1/3は連れて行かない・分からないとしており、今後検討の余地を残している。
- 4) 死者儀礼は生活の中に定着している清めの塩

や北枕、死亡時の看護でも学習している着物の左前や縦結びについてはよく知っていた。反対に湯灌は、死亡時の看護を学習しているにもかかわらず、儀礼としての意識がないため、ほとんどが知らないと回答した。

儀礼は残された家族の悲嘆を緩和するために重要であり、民俗学、社会学など死に関する学際的教科(タナトロジー)を取り入れて看護教育におけるデス・エデュケーションを行う必要がある。

引用・参考文献

- 1) 菊川忠夫：生と死の哲学，p.167，世界書院，1991.
- 2) 斎藤友紀雄：グリーフ・ワークをめぐる，現代のエスプリ，248，p.20，1988.
- 3) 橘 雅子：女子大生の死者儀礼に関する知識について，死の臨床，10(1)，p.5，1987.
- 4) 3) に同じ
- 5) 日野原重明，山本俊一：死生学 死から生の意味を考える，p.61，技術出版，1988.
- 6) 黒瀬豊彦：お葬式の基礎知識，p.80，東栄堂，1985.
- 7) 3) に同じ
- 8) 3) に同じ
- 9) 3) に同じ
- 10) 宇都宮輝夫：悲嘆の社会学，現代のエスプリ，248，p.61，1988.
- 11) 日野原重明，山本俊一：死生学，p.54，技術出版，1988.
- 12) 波平恵美子：病と死の文化 現代医療の人類学，p.44，朝日新聞社，1990.
- 13) 波平恵美子：病と死の文化，p.34，朝日新聞社，1990.
- 14) アルフォンス・デーケン：死への準備教育 第1巻 死を教える，メジカルフレンド社，1986.
- 15) アルフォンス・デーケン：死への準備教育 第2巻 死を看取る，メジカルフレンド社，1986.
- 16) アルフォンス・デーケン：死への準備教育 第3巻 死を考える，メジカルフレンド社，1986.
- 17) 樋口和彦，平山正美：生と死の教育 デス・エデュケーションのすすめ，創元社，1985.
- 18) 井口章二：日本の葬式，筑摩書房，1977.
- 19) J. ヒントン：死とのかい，三共出版株式会社，1979.
- 20) 立川昭二：歴史紀行 死の風景，朝日新聞社，1982.
- 21) ロバート・フルトン：デス・エデュケーション 死生観への挑戦，現代出版，1984.

(1991年11月6日受理)